

講演

大学教育の現場から見た歯科の国際化の課題と展望

宮 崎 隆

ICDマスターフェロー

●抄 録●

歯学教育においても国際化の必要性が高い。医学教育では国際標準化が進み、臨床実習を海外の大学と互換することが可能になってきた。一方、歯学教育では国際標準化はまだ確立されていない。日本は高齢社会に対応した新しい歯科医療への挑戦を続けて教育もその方向にシフトしているので、学生には世界の歯科医療の多様性を学ぶとともに、日本の方向性を世界に向かってアピールして欲しい。

キーワード：歯学教育、国際化、国際標準、高齢社会

I. はじめに

我が国は少子高齢化が急速に進み国際競争力が大幅に低下している。今後健全な日本社会を維持するためには、歯科を含めて国際化が必須であることは論を待たない。

II. 昭和医科大学の国際交流

昭和医科大学は現在、4学部8附属病院を擁している。国際交流センターでは職員の海外留学、海外渡航の手続きや、大学院留学生の受入れ、学部学生の交換留学をお世話している。現在まで77か国から1,106名の大学院留学生を受け入れている。

III. 学部学生の国際交流

低学年から参加できるプログラムは以下である。

- 1) UCLA サマーセッション
- 2) ポートランド州立大学サマープログラム
- 3) オックスフォード大学医療体験プログラム
- 4) ワライラック大学（タイ）夏季研修
- 5) ポートランド州立大学春季プログラム
- 6) カンボジア医療体験プログラム

高学年海外選択実習は、医歯薬学部の5～6年生が臨床実習の期間中に研修先のクリニカルクラークシップに従事するプログラムである。医学部はウイーン医科大学ほか7大学、歯学部は南カリフォルニア大学ほか8大学、薬学部はオルバニー薬科大学ほか4大学に派遣している。研修期間は医学部が原則1か月、歯学部・薬学部は2週間以上である。

一方、学部学生の選択実習受入れは、医学部が原則3か月と期間も非常に長い。歯学部ではウイーン医科大学以外は1～2週間と短い。

IV. 医学部と比較した歯学部の問題点

歯学部では学生・教員にゆとりがないことや、英語力不足に加えて、臨床実習の位置づけが医学部と異なっている。

2010年の米国外国医師卒後研修委員会からの通告を受けて、日本医学教育評価機構が発足し、全国の医科大学・医学部は世界医学教育連盟の国際基準に則った



※冬期学会講師

(みやざき・たかし)
昭和医科大学 国際交流センター

カリキュラムを導入した。本学医学部では4年次の11月から6年次の6月まで72週間の臨床実習を行っている。7つの附属病院で3,000床を超える病棟があるので、クリニカルクラークシップができる環境にある。学生は希望の診療科の実習を海外協定校で受けることができるし、受入れに関しても同様である。

一方歯学教育では国際基準は確立されていない。歯学部の附属病院は規模や教員数では圧倒的に医学部に比べて小さいし、歯科医療は外来中心で、視野の狭い口腔を対象にしているため、臨床実習プログラムの作成には困難を伴う。

本学では5年時1年間歯科病院で臨床実習後、6年時4～5月を選択実習期間として、学内外の医療機関、海外大学での実習に従事する。昔のような基本治療を習熟させる実習は難しい。海外で研修する学生は、先方の学生が実際に患者に治療していることに驚く。

一方、海外からの学生は、母校では矯正やインプラントなどの専門診療科での体験が少ないようで、これらの診療科希望が多い。また、摂食嚥下リハや障害者歯科、多職種連携、チーム医療など我が国で充実している領域への関心が高い。

V. おわりに

日本の歯学教育は伝統的な臨床実習の到達レベルにおいては諸外国より劣っているが、基礎教育の充実、他国よりも幅広い歯科医療の充実などは世界をリードしている。学生には日本の歯学教育に自信を持って欲しい。今後、日本が先陣を切って突入した高齢社会に全世界が追随してくる。歯科医療が健康寿命の延伸に貢献することを、学生が世界に向かって発信して欲しい。ICDには国際医療協力を活躍されているフェローが多数いるので、今後学生教育に参画して、学生に夢を与えて欲しい。

Challenges and Prospects for the Internationalization of Dentistry from the Perspective of University Education

Takashi MIYAZAKI, D.D.S., Ph.D., M.I.C.D.

International Exchange Center, Showa Medical University

There is a strong need for internationalization in dental education. International standardization in medical education has progressed, making it possible to interchange clinical practice with overseas universities. In contrast, international standardization has not yet been established in dental education. Japan continues to take on the challenge of new dental care for an ageing society and education is shifting in this direction, so I would like students to learn about the diversity of dental care in the world and appeal to the world for Japan's direction.

Key words : Dental Education, Internationalization, International Standardization, Aging Society